

1 1	海部	津島市立天王中学校 愛西市立立田中学校 あま市立甚目寺西小学校 大治町立大治中学校	名前 ○ 渡會 顕栄 伊ワタ エリ 岩田 恵里	ミズタニ ユキヒロ 水谷 行宏 カチカワ ショウタ 勝川 翔太
-----	----	--	----------------------------------	--

分科会番号	3	分科会名	社会科教育（中学校）
-------	---	------	------------

研究題目

主体的に学び、他者と協働し、課題解決に向けて粘り強く取り組むことのできる生徒の育成
－生徒主体のグループ活動を通して－

研究要項

1 はじめに

令和3年度から現行の学習指導要領がスタートし、「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業づくりが必要不可欠となった。生徒たちが支えていく現代社会は、情報化、グローバル化、少子高齢化など、予測不能な社会といわれている。現代の日本の問題の一つに、政治への興味の低さが挙げられる。令和5年に行われた愛知県知事選挙の投票率は36.4%であり、投票率の低さが問題となった。この問題を自分事として捉えなければならぬと考える。そのような問題を解決していくためには、主体的に学び、他者と協働し、課題解決に向けて粘り強く取り組む力を育成することが学校教育の責務であると考え。その実現に向け、教師主体の受動的な授業ではなく、生徒主体の能動的な授業を実施していく必要があると考えた。

本研究は、第1学年から抽出した学級を対象に実施していく。生徒の実態としては、誰とでも分け隔てなくグループ活動に意欲的に取り組むことができ、互いの考えを認め合うことができる生徒が多い。その中で、社会科の学習を語句の暗記として捉えている生徒が見受けられる。また、自分の考えをもつことはできるが、自分の考えにこだわるあまり、他の考えを基に深めることを苦手としている生徒が多い。

単元は、地理的分野の「世界各地の人々の生活と環境」を取り扱う。この単元では、世界の「人々の生活の様子」を通して世界各地の多様性を学習する。主食の農産物、それらが作られている場所、その地域に暮らす人々の服装、住んでいる家屋などに着目し、人と自然の関わりについて重点的に学習を進めたい。しかし、「人々の生活の様子」を知るだけでは好奇心を満たす授業となってしまう。そこで、伝統的な生活の変容とその現状を知り、変容の原因について考察を加えることで、資料を活用し主体的に探究できると考えた。

そこで本研究では、他者と資料への多面的・多角的な見方を共有し、学習を深めるグループ活動を通して、主体的に学び、他者と協働し、課題を解決しようとする生徒の育成を目指すことにした。単元を通して、「人と自然の関わり」を課題として設定することで、SDGsや伝統的な生活様式の衰退など、課題を追究したり解決したりできるよう工夫したい。また、考察した情報や自分の考えをタブレット端末にまとめるなど、ICT機器を活用しながら課題解決に向けて粘り強く取り組む能力を育みたい。

2 研究仮説

主体的に学ぶための授業構想を工夫し、グループで取り組むことのできる課題を設定すれば、主体的に学び、他者と協働し、課題解決に向けて粘り強く取り組むことのできる生徒が育つであろう。

3 研究方法

(1) 生徒主体の授業構想の工夫

「主体的・対話的で深い学び」を追究するために、学習課題を明確に示し、学習の手順や方法を確認する。そして、自分で考えたり調べたりする時間や、他者と協働してまとめたり説明し合ったりする時間を確実に確保する。また、生徒主体の授業への手立てとして、教師ではなく生徒が授業の進行を行う「ミニマムティーチャー」を設置し、実施する。

(2) 課題設定の工夫

単元を通して、世界各地の人々の生活の様子に着目し、人と自然との関わりについて取り扱い、生活について考える時間を設定する。土地や気候に合った生活がどのようなものであるのか、グループで考える時間を設け、人と自然の関わりに対する興味・関心を高める場を設ける。

(3) グループ活動の充実

グループ活動での学び合いを習慣化するため、授業全体を通して、座席をグループ隊形で行う。また、グループ内で分からないことがある場合は、他のグループと意見を共有できる場を設ける。

(4) タブレット端末の活用

授業全体を通して、ICT機器を効果的に活用し、資料の分析や情報の選択・収集を円滑に行い、学習内容をまとめたレポートを作成し、振り返りも入力する。

4 研究対象 中学校 1 年生

5 単元 世界各地の人々の生活と環境（9 時間完了）

6 単元のねらい

- (1) 世界各地の人々の生活の様子とその変容や環境の多様性を、自然的条件や社会的条件と関連付けて理解している。 (知識・技能)
- (2) 世界各地の人々の生活の様子とその変容や環境の多様性を、自然的条件や社会的条件と関連付けて考察し、その過程や結果を適切に表現している。 (思考・判断・表現)
- (3) 世界各地の人々の生活の様子とその変容や環境の多様性に対する関心を高め、それを意欲的に追究している。 (主体的に学習に取り組む態度)

7 単元計画

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準
1	世界各地の食事を知ろう ・ 世界各地の食事と自然環境の関わりについて考える。 ・ 主食の特徴や気候区分を読み取る。	・ 主食となる農産物がどのような自然環境で育っているのかを、主食の特徴や気候区分の資料から考えさせる。 ・ 主食の分布図を通して、主食と気候区分の関わりが深いことに気付かせる。	主 世界各地の食事や自然環境の特色について意欲的に考えようとしている。 (観察)
世界各地の人々は、自然とどのような関わりをもち生活しているのだろう			
2	暑い地域に生きる人々を知ろう ・ 暑い地域での生活について理解し、レポートを作成する。 ・ 現代において、その生活はどのように変容しているか考える。	・ 暑い地域の自然環境に暮らす人々の生活の工夫について、タブレット端末を活用し、多くの資料から読み取り考えさせる。 ・ 先住民の生活の変化について、グループで考えを共有し、環境や政策などの面から原因を考えさせる。	思 暑い地域で暮らす人々の生活の様子を、住居や食事から読み取り考えることができる。 (ICT機器)
3	乾燥地域に生きる人々を知ろう ・ 乾燥地域での生活について理解し、レポートを作成する。 ・ 遊牧民の生活がどのように変容しているか考える。	・ 乾燥地域の自然環境の特色を知り、農業には適さない地域であることに気付かせる。 ・ 遊牧民が移動して生活する理由について、グループで話し合い、考えさせる。	思 乾燥地域での生活とその変容について説明できる。 (ICT機器)
4	温暖な地域に生きる人々を知ろう ・ 温暖な地域での生活について理解し、レポートを作成する。 ・ 伝統的な文化と温暖な気候による小麦栽培との関わりについて考える。	・ 「ミニマムティーチャー」を設置し生徒を主体として、温暖な地域での生活について考えさせる。 ・ 雨温図から、1年を通して温暖で降水量が多いことに着目させ、農業に適する地域であることに気付かせる。	知 温暖な地域の自然環境の特色と伝統的な文化の関わりについて理解できる。 (ICT機器)

5	寒い地域に生きる人々を知ろう ・ 寒い地域での生活について理解し、レポートを作成する。 ・ 植物の育たない気候での人々の食事について考える。 ・ 寒い地域で見られる、高床式について考える。	・ 寒い地域の厳しい自然に負けずに生活する人々の生活様式と、その様式の変容の中に残るイヌイットの人々の文化について考えさせる。 ・ 高床式の住居に関する資料を配付し、その使用意図について考えさせる。	知 寒い地域で暮らす人々の生活の工夫について説明できる。 (ICT機器)
6	高地に生きる人々を知ろう ・ 標高が高くなるにつれて平均気温が低くなるという高地の特色を理解し、レポートを作成する。	・ 農産物が育ちづらい自然環境での農業の工夫として、それに適した方法を行っていることに気付かせる。 ・ これまで学んだ地域を含め、昔と現在の生活の変容について、グループで話し合い考えさせる。	知 高地で暮らす人々の農業や服装の工夫について説明できる。 (ICT機器)
7 8	興味のある国の生活を知ろう ・ 興味のある国に暮らす人々と自然の関わりについて調べる。 ・ 課題を設定し、それに対する手立てについて考える。	・ 人と自然の関わりについて考えさせ、さらに、調べている国の独自の文化により、同じ気候であっても生活文化が変わることに気付かせる。 ・ 席を移動して、似た気候や同じ州に属する国などについて、他者と協働しレポートに必要な資料を収集させる。	主 興味のある国で暮らす人々と自然の関わりについて、意欲的に考えようとしている。 (観察)
9	世界各地の人々の暮らしを知ろう ・ 調べた国についてグループごとに発表を行い、その国の歴史や自然、文化によって生活が異なることを理解する。	・ 自分の調べた国と他の人が調べた国を比較して、どのような点で異なり、生活文化が変わっているのか考えさせる。 ・ 昔と現在の生活の様子から、人と自然の関わりが深いことに気付かせる。	主 国ごとに自然環境に合った生活の特色があることを理解し、更に探求したいという興味・関心を深めることができる。 (観察)

8 抽出生徒

生徒A	生徒B
<p>社会科への授業に対して意欲的であり、課題解決に向けて自ら調べることができる。しかし、自分の考えに満足して、それ以上追究することが難しい。</p> <p>グループでの意見交換を通して、他者と協働し、深い学びができるように支援していく。</p>	<p>社会科への授業に対して意欲的であるが、知識の定着が不十分であり、個別で資料や地図を活用することも苦手である。</p> <p>学び合い活動を通して、知識の幅を広げさせ、また、資料活用に取り組みせ、多面的・多角的に社会的事象を理解できるよう支援していく。</p>

9 研究の実際

【第1時】 世界各地の食事を知ろう

世界各地の多様性や人と自然の関わりについて学ぶ導入として、世界の主食の分布図を見て、地域ごとにどんな主食であるかを考察する活動を実施し、主食の特徴や気候区分などの資料から考えた。生徒には、教師が事前に作成したワークシートを、生徒のタブレット端末に配付し学習に取り組みさせた【資料1】。また、単元を通して、生徒自身の社会的事象に対しての気付きの時間を増やす手立てとして、教師は、本時のねらいや教科書の本文の確認、振り返りのみを話すようにした。

グループでの意見交換では、「米については、田んぼには多くの水が使われているため、雨が降る地域で主食にされていると思う。雨があまり降らない地域では作物は育ちづらいため、動物を食べているのかもしれない」と考察する姿が見られた。その

<p>⑦雪や氷の上でソリや荷物を運ぶ 乳や肉を食用したり、皮を毛皮として利用</p> <p>①海に生息し、生肉を食べることでビタミンを摂取できる</p> <p>②日本の主食で、5月から9月に雨が降る、高温多湿な気候でよく育つ</p> <p>③厳しい環境でも、ほっとけば勝手に結構育つ</p> <p>④パンの原料で、意外と降水量の少ない場所でよく育つ</p> <p>⑤米と同じ気候でよく育つ →メキシコの伝統料理であるタコスの原料 メイちゃんがお母さんにあげようとしたもの</p> <p>⑥「砂漠の船」とよばれ、人や荷物の運搬として利用 肉や乳は食用として、うんこは燃料として利用</p> <p>⑦毛を利用したり、肉や乳を食用したりするために飼育</p>
--

【資料1】主食の特徴についてのワークシート

後行った答え合わせでは、主食と気候の関わりが深いことに気付く生徒が多く見られ、「主食と気候が合っていない地域があるのはなぜだろう」と疑問をもつグループがあった。学級全体でその疑問について考えたところ、「その地域に住む人々の歴史や文化が関係しているのかも」という意見が出た。授業の最後には、本時の内容から、主食から読み取ることのできる気付きや感想、疑問などの振り返りを行った【資料2】。

世界の主食について分かった。地域の特色から見たり、世界の気候区分から見たりして考えることができた。世界にはいろいろな気候があって、暑かったり寒かったり、乾燥していたり湿度が高かったり、四季がなかったりすごいなと思った。小麦やとうもろこしを主食にしている国が多いということを知った。代表的な主食は分かったけど、民族や国ごとに違うと思うから調べてみたい。

【資料2】生徒の振り返り

【第2時】 暑い地域に生きる人々を知ろう

第2時では、マレーシアの生活に着目し、暑い気候の暮らしについて、多くの資料を基に、「マレーシアの生活の昔と今」という内容のレポートを作成し、授業の最後にグループ内で発表を行った。生徒には、本単元を通して使用する、熱帯、乾燥帯、温帯、冷帯、寒帯、高山気候に関わる写真や分布図、雨温図などの資料の配付を行った。

まず、暑い地域で快適に生活する手段について話し合う姿が見られた。生徒Aは、雨温図から1年中気温が高いことや降水量が多いことを読み取り、「日本でいうところの8月の雨の日の蒸し暑さだね」と考えることができた。資料を見ていく中で、気候と服装や住居との関わりに気付く生徒が増えていき、グループ内の困っている生徒と共有する姿が多く見られた。また、先住民であるオランアスリの生活について考える手立てとして、グループで話し合うよう促したところ、現代での暮らしの様子が昔とはかなり変わっていることに気付くことができた【資料3】。生徒Bは、意欲的に多くの資料に目を通していたものの、熱帯の資料を精査することが難しい様子であった。



【資料3】生徒のレポートの「変わりゆく生活」

【第3時】 乾燥地域に生きる人々を知ろう

第3時では、モンゴルの生活に着目し、乾燥地域の暮らしについて、「モンゴルでの遊牧」「家畜のめぐみ」「遊牧民の生活の変化」「経済活動による環境の変化」の4つのテーマから一つ選び、レポートを作成し、クラス全体でそれぞれの発表を行った。

遊牧民が移動して生活する理由について考える手立てとして、家畜について調べるよう声をかけた。グループで話し合いをしたり調べたりすることで、家畜の餌となる草がよく育つ、雨が少し降る地域に移動していることが分かり、気候と生活の関わりについて知ることができた。乾燥帯の中でも雨季と乾季に分けられていることに気付く生徒も見られた【資料4】。生徒Bは、日本と乾燥地域での生活を比較し、ゲルでの生活や食事について考えることができた。また、現在の日本のように流通システムが確立されている国が多い中、現在のモンゴルの遊牧民はどのような生活に変容したのかと興味をもつ生徒が見られた。生徒Aは、グループの話し合いを通して、先住民族の生活の変容について疑問をもち、共通点として近代化によって生活が便利になった反面、伝統的な生活や文化が失われてどこに住んでいても同じような暮らしになっていると考えることができた。



【資料4】生徒のレポートの「モンゴルでの遊牧」

【第4時】 温暖な地域に生きる人々を知ろう

第4時では、イタリアの生活に着目し、温暖な地域の暮らしについて、「イタリアの気候と農業」「イタリアの街の生活」「変化する食生活と家族」の3つのテーマから一つ選び、レポートを作成し、クラス全体でそれぞれの発表を行った。また、本時から生徒主体で作り上げる授業の手立てとして、生徒Aは「ミニマムティーチャー」として教師役を行い、授業に取り組んだ【資料5】。



【資料5】生徒Aによるミニマムティーチャー

グループでの話し合いでは、「イタリアといえばピザやパスタだよ」という声が挙がり、なぜそれらが多く食べられているのかを、第1時の学びを基に調べる姿が見られた。それにより、日本と同じ温帯でも降水量によって主食が大きく変化を知ることができた。また、石造りの住居が多いことから、気候との関わりや住居の素材の調達などとの関わりなど、視野を広げて考える姿も見られた。また、生徒Aは「ミニマムティーチャー」を行ったところ、「教師役として授業を行うことで、何を大切に授業に取り組みばいいのかが明確となった。分からないことがあるときに、すぐに先生に聞きやすくなった」という感想が出て、教師役を行うことで、生徒全体が主体となって授業に取り組むことができた。

【第5時】 寒い地域に生きる人々を知ろう

第5時では、北アメリカ北部アラスカ州の生活に着目し、寒い地域の暮らしについて、「ツンドラ地域に住む人々の生活」「変化する生活」「現存する伝統文化」の3つのテーマから一つ選び、レポートを作成し、クラス全体でそれぞれの発表を行った。

前時までの授業で、暑い地域、乾燥地域、温暖な地域と学んだため、個人で考え資料を精査することができる生徒が多く見られた。生徒Bは、寒い地域の主食について、「トナカイやアザラシなどの肉類だけでは栄養が不足してしまうため、寒い地域でも食べられている農作物はないのだろうか」と疑問をもち、課題解決に向けて活動することができた。話し合いや調べ学習をすると、アザラシの肉を生のまま食べることで不足してしまうビタミンを摂取できるということが分かった。寒い地域では古くから食べられているため、生肉を食べてもお腹を壊さないという、その地域の人々の体も状況に応じて変化する可能性があることに気付くことができた。また、寒い地域の住居について考える手立てとして、「寒い地域でも高床式の住居に住んでいる」と生徒に伝えた。高床式の住居については、暑い地域での学習で既に学んでいたため、「なぜ寒い地域で高床式なのだろう」という声が多く挙がった。理解への手立てとして、寒い地域の地盤について助言を行い、高床式の住居でない場合の永久凍土への影響を考えさせた。生徒Aは、話し合いの中で寒い地域では住居の中を温かくしないと快適に生活できないことに気づき、住居の熱で永久凍土が溶けてしまうと予測することができた【資料6】。

学んだこと・気づいたことを振り返ろう

北アメリカの北は冷帯気候で寒さに耐えるための工夫をたくさんしていることが分かった。高床式の家はその地域の気候によっては意味が変わってくることが分かった

【資料6】生徒Aの振り返り

【第6時】 高地に生きる人々を知ろう

第6時では、アンデスでの生活に着目し、高地での生活について、「中央アンデス高地での暮らし」「急速な生活の変化」の2つの内容から一つ選び、レポート作成を行い、クラス全体でそれぞれの発表を行った。前時までのところで、1時間の学習の内容について少しずつ複数のレポートをまとめることのできる生徒が増えたため、本時ではテーマを2つに絞って行った。高山気候の特徴を捉えさせる手立てとして、「同緯度の低地より気温が低い」ということを伝え、授業を行った。まず、高地の特徴について考え調べる生徒が多く見られ、低地と比べ、気温が低いことや降水量が少ないこと、酸素が薄いことなどを知ることができた。この点から、主食となる農作物を育てづらいうことを導き出し、比較的厳しい気候でも育ちやすいイモ類などが多く食べられていることに気付くことができた。生活の変容について、前時までの学習と比較して「どの地域も同じような生活になっている」と気付く生徒がほとんどであった。現在の生活について、食べ物が手に入りやすくなったり、体調が悪くなったらすぐに病院に行くことができたり、いい生活になった」と肯定的に捉える生徒と、「その土地で生まれた言語や伝統的な生活文化が失われて、全員が同じような生活になるのは何かもったいなさを感じる」など否定的に捉える生徒がおり、意見はさまざまであった【資料7】。

学んだこと・気づいたことを振り返ろう

技術の発展に合わせて便利になっていくけれど、昔ながらの生活が失われてきているのと、地球温暖化などいろいろな問題もあるから問題の解決が大変だなと思いました。

【資料7】生徒の振り返り

【第7・8時】 興味のある国の生活を知ろう

第7・8時では、前時までに学習した内容を踏まえ、人と自然との関わりに着目し、興味のある国の生活について生徒自らテーマを設定し、2時間かけてレポート作成を行った。生徒には、興味のある国について、前時までに学習した内容と関連しレポートを作成するよう指示した。また、SDGsや環境問題など、今日的な課題を自分なりに設定するよう伝えた。他者との協働する学びの手立てとして、似た気候や似た文化、調べる国同士で共通点がある場合、席を移動して協働して学習を行うことを認めた【資料8】。



【資料8】席を移動して取り組む様子

生徒Aは、スウェーデンを取り扱い、寒い気候における生活の様子を調べる中で、昼夜問わずヘッドライトをつけず走行することが違法であることに着目した。ヘッドライトをつけなければ安全を確保できないため、理由として天候が変わりやすいことや日照時間の短さを考察し、寒い地域の自然環境について理解を深めることができた【資料9】。生徒Bは、日本を取り扱い、昔と現在の生活を比較して、環境問題を課題とし、調べ学習を行った。食事のほとんどを自分たちの畑で作ったものでまかなったり、食べ残しを畑の肥料にしたりするなど、昔は環境に優しい暮らしであったことを知り、現在の暮らしと比較し、自分にできることはないかと考えることができた【資料10】。



【資料9】生徒Aのワークシート

学んだこと・気づいたことを振り返ろう

昔の暮らしは不便だったけど、エネルギーや資源をあまり使わず、排気ガスやゴミも出さない、環境に優しい暮らしであったことが分かった。また、昔の人には、不便さを補うために自然の力を上手く利用する様々な知恵があったと思う。食べること、遊ぶこと、生活の全てが自然と深く関わっている感じがした。

【資料10】生徒Bのワークシート

【第9時】 世界各地の人々の暮らしを知ろう

本単元のまとめである第9時では、前時で行った調べ学習を基にグループと学級全体で発表を行った。発表の際には、発表者に対して質問する時間を設け、気になったことや分からなかったことなどを追究する機会を設定した。学級全体での発表は希望者のみとし、発表者の画面を全員のタブレット端末へ投影し実施した。タブレット端末のペン機能をうまく使い、具体的に伝えたいことや環境の移り変わりなどを分かりやすく学級全体に共有することができた。

10 仮説の検証

(1) 生徒主体の授業構想の工夫

生徒自身の気付きの時間を増やすことで、社会的事象に対して探求したいという思いを高めることができた。また、生徒Aは「ミニマムティーチャー」で教師役を体験したことで学び方を習得し、生徒たちの主体的な授業をつくることができた。

(2) 課題設定の工夫

単元を通して、人と自然の関わりについて取り扱うことで、学習課題を明確にし、生徒に分かりやすく提示することができた。また、生徒Bをはじめ多くの生徒が自ら課題設定を行うことができ、それぞれ気になった社会的事象について、意欲的に追究することができた。

(3) グループ活動の充実

授業全体を通して、グループ活動を実施することで、調べた事柄や気になったこと、わからないことなどを言語化し、他者と共有することができた。また、他者と協働し、レポートを作成するにあたって役割分担を行い、効率よく学習に取り組むことができた。

(4) タブレット端末の活用

タブレット端末を活用することで、多くの資料に触れ、レポート作成に必要なものを精査し、生徒間の共有を行うことができた。

11 成果と課題

生徒Aは、社会科への授業に対して意欲的であり、課題解決に向けて自ら調べることができるが、自分の考えに満足して、それ以上追究することが苦手であった。しかし、単元を通して、グループで活動することで、他者の意見に耳を傾け、協働的な学びとすることができた。また、第7・8時では、もともと知っていた知識に疑問をもち、深い学びへと繋げることができた。本実践を通して社会的事象に対する他者の考えを大切に、主体的に学習に取り組むことができた。生徒Bは、社会科への授業に対して意欲的であるが、知識の定着が不十分であり、一人で資料や地図を活用することも苦手であった。単元を通して、社会的事象に興味をもち、人と自然の関わりについて意欲的に調べる姿がレポートから見られた。第5時では、寒い地域での食事について、自分の意見を他者に伝えることができた。

しかし、二つの課題が残った。一つ目は、自分の意見をもつことが難しいと感じる生徒がグループ活動の中で見られた。机間指導を重点的に行い、教師が知識を教える時間を確保すべきだと感じた。二つ目は、本研究では社会科への興味・関心を主体的に高めることを重視したため、単元テストの結果から基礎・基本の定着が不足していると感じる生徒が見られた。小テストや一問一答を効果的に活用しながら、生徒の学習理解度を確認し、基礎・基本の定着に努めるべきだと感じた。